

書かれざる歴史——FTAを巡って

畠山 襄 Noboru Hatakeyama

(一財)国際貿易投資研究所 理事長

歴史は、時に冷酷である。当事者が語らないため、最も肝腎な要因などの部分が隠れてしまうことがあるからだ。

日韓 FTA 交渉の例で考えて見よう。

日韓 FTA 交渉は 2004 年 11 月を最後に行なわれなくなった。その行われなくなった要因のうち、最も肝腎なものは何か。

通常、韓国との交渉が中断した要因のうち、最も肝腎なものは、次の 3 点であると言われている。

- ① ある段階で交渉が行き詰まったため、日本側、韓国側で非農産物及び農産物に分け、両国夫々どれぐらいの平均輸入自由化率の実現を念頭に置いて同交渉に臨んでいるのかを、極秘で情報交換しあうこととしようとの合意が行われた。その際、噂では、日本政府が農産物について 56% 程度の平均自由化率で自民党に打診中という情報が流れ、韓国側は「これでは交渉の席に戻れない」として中断になったという説。
- ② そう言われてはいるが、実際には自動車、同部品業など機械製造業からの強い反対が効いたという説。
- ③ 背景として、元来韓国政府は、i) 日韓貿易収支の慢性的対日赤字のため、日韓 FTA を結んでもこの対日貿易赤字が増えるだけであり、加えて、ii) 日本は元々低関税なので、日

韓 FTA による関税の下げ幅は小さいから、韓国政府全体として日韓 FTA に必ずしも積極的でなかったという説。

しかし、筆者は、これら3つだけでは、最も肝腎な要因の分析が欠けていると思う。

最も肝腎な要因とは何か？それは、日本に代わる韓国にとって新たな FTA 交渉相手国の登場である。米国の登場なのだ。

実は、韓国は大口 FTA の交渉の相手方を、日本から米国へと、鮮やかに乗り換えたのだ。2004年11月3日の東京会合を中断したのを最後に、韓国のキム・ヒョン・ジョン通商交渉本部長をトップとする韓日 FTA 交渉団の一行は、対日交渉の席に戻らなかった

そして、同じ年の同じ11月。その20日—21日にチリのサンチャゴで APEC の首脳会議が開かれ、米国通商代表のロバート・ゼーリックも韓国通商交渉本部長のキム・ヒョン・ジョンも、首脳随行その他の目的でサンチャゴを訪れていた。そして、ゼーリックの提案で両者の会合が持たれ、かねて韓側から申し込まれていた米韓 FTA 構想に対するいわば中間回答として、ゼーリックから6ヶ月の予備協議の提案が行われた。キム・ヒョン・ジョンはこれをその場で受け容れた*。この米国との FTA 予備協議をキム・ヒョン・ジョンが受け入れた時に、日韓 FTA 交渉の中断が決まったといってよいだろう。

*キム・ヒョン・ジョン著「韓米 FTA を語る」(韓国語版。弘盛社刊)

このように当事者が語るまで、歴史は最も肝腎な部分について語らないことがあるのだ。歴史の面白さであり、怖さである。

もう一つ例を挙げよう

APECは、日本の通産省が原案を作成したが、日本の外務省の反対もあって、これは日本の門を出なかった。しかし、当初の通産省原案と豪州政府原案との間では重要な違いがあった。

前者には米加が入っていたのに、後者にはこの2ヶ国が入っていなかったのだ。理由は、当時通商産業審議官としてAPEC設立に八面六臂の活躍をされた村岡茂生氏によれば、連絡ミスとかいうような手続き的なことでなかったようだ。すなわち、APEC第1回会合は1989年11月に行なわれたのだが、この年1月1日から実は米加FTAが発効していた。米加FTAにはその名の通り豪州が含まれていない。豪州としては、これに含まれていないことに含むところがあったのだ。すなわち、米加FTAから豪州を排除したことに対し、豪州はAPEC当初メンバーから米加を排除することをもって報いたのだという。

筆者は、通商産業省通商政策局長として、快晴のキャンベラで行われた記念すべきAPEC初会合に大臣随行で出席したが、初会合直前まで主催国と有力参加国の一部に結構深刻な争いがあったかのごとき風情は感じられなかった。観察力が不足していたのかもしれないが……。

この巻頭言が読者のお目に触れるころには以下に述べる点についても結論が出ているだろうが、今やカナダに四半世紀前とは逆の風が吹いて、TPPに同国が入れるかどうか、必ずしも道は平坦でないようだ。カナダはTPPに入るのか、入らないのか、いずれにせよ、どういう力がどこに加わって、その結論に達したのか、また書かれざる歴史の1ページが刻まれるのかもしれない。